

研究主題 **不登校を中心とした学校不適応事例の
見立てに関する一考察**

【研究担当者】佐藤一也 中村誠子 佐々木一義
【この研究に対する問い合わせ先】

0198-27-2714 FAX 0198-27-3562
E-mail sodan-r@center.iwate-ed.jp

このリーフレットは、見立てのポイントと事例を基にした見立ての具体例について概要を示したものです。ポイントや事例の詳細は、教育センターWebページにある本資料に掲載していますのでご覧ください。

適切な見立て

本研究では、見立てを、不適応状況やその背景・要因の理解を基にした、対応方針の設定と具体的な対応策の決定を含むものととらえました。

見立てで大切なのは、収集した情報を最大限に活かして「仮に」見立て、今できることから迅速に対応するということです。そして、対応の結果や状況に応じて柔軟に見立て直しをしていくことが重要です。

また、多面的な視点から理解と判断をし、多様で組織的な対応につなげるためには、関係者が協働で見立てを行うことが有効です。

見立てのポイント

見立ての各段階のポイントを、次の1～3のようにまとめました。

1 情報把握と不適応状況の理解

見立てに際しては、収集した事実に基づいてどのように判断するかが重要です。誰にどのようなことが起こり（客観的事実）、それを誰がどのように受け止めたのか（心理的事実）を理解し、その理由や示唆することを判断（解釈、意味付け）していきます。その判断が偏り、独断的にならないようにするために、まずは事実を事実として共有した上で判断していくことが大切です。

1 「情報把握と不適応状況の理解」のポイント！

具体的にどのような出来事や言動があったか（客観的事実）情報収集をする。

児童生徒自身はどう感じているか（心理的事実）を丁寧に把握する。

事実と判断を明確に分けて情報収集する。

「精神疾患」、「発達障がい」等の視点をもって考察する。

注目した事実を基に、時間的な推移や関係性に留意しながら、児童生徒の「苦戦状況」と「資源」を、多面的、具体的に判断する。

2 対応方針の設定

関係者が協働で見立てをしていく際には、児童生徒が、どのような要因、背景があって現在の苦戦状況にあるのか。どのような援助をすれば改善、解決に向かうのかということを、時間的な経過をふまえながら、わかりやすい仮説のストーリー（以下「仮説ストーリー」と表記）としてまとめることが有効です。それによって、背景・要因と苦戦状況がつながり、改善・解決への方向性が理

解しやすくなります。

このストーリーは、苦戦状況を理解する方向性でまとめる「仮説ストーリー1」と、資源を活かした解決の方向性でまとめる「仮説ストーリー2」の二つの段階で設定します。

2 「仮説ストーリー作成」のポイント！

児童生徒が、どのような要因、背景があって現在の苦戦状況にあるのか。(仮説1) どのような援助をすれば改善、解決に向かうのか(仮説2)ということ、時間的な経過をふまえながら、わかりやすい仮説ストーリーとしてまとめる。
仮説ストーリーとしてまとめる際には、「安心感」「信頼感」「自己肯定感」をキーワードとして活用する。

3 目標設定と対応策の検討

目標の設定に当たっては、資源を再検討しながら、状況に合わせて当面の目標をスモールステップで設定して取り組むことが有効です。

また、対応策を検討する際は、「どのような目的で」「誰が」「誰に対して」「何を」「いつ」「いつまで、どれくらいの頻度で」「どのようにするか/しないか」を明確にすることが重要です。

3 「目標設定、対応策の検討」のポイント！

目標を、スモールステップで設定する。

「安心感」「信頼感」「自己肯定感」をキーワードに、資源を活用した柔軟な対応策を考える。

対応策の検討では、特に曖昧になりがちな「どのような目的で」「いつまで」「どのように」という点を明確にする。

見立ての実際

見立てのポイントに即して、不登校事例について見立てを行い、「見立てシート」にまとめました。

対象； 小学校4年女子 A

状況の概要(初回面談の情報)； 略〔[教育センターWebページ](#)・本資料をご覧ください。〕

見立ての実際

1 情報の把握、不適応状況の理解

まず、収集した情報の中から、「現在はどのような苦戦状況があるのか。」「直接のきっかけとなった10月中旬には、どのようなことが起き、どのような対応をしたのか。」「10月中旬以前(幼児期も含む)は、どのような状況だったのか。」という視点で、苦戦状況及び資源にかかわると考えた事実を抽出し、見立てシート【表1】(p3)の「注目した事実」欄に時系列で整理して書き入れました。

次に、事実の関連性をとらえながら、「何が起きているのか?」「なぜ、そうするのか?」「どのような意味なのか?」などの視点で、Aがどのような苦戦状況にあるのか判断し、見立てシート【表1】「判断」の欄に書き入れました。判断する際には、精神疾患や発達障がい等の特徴は見られないか注視し、「学校は人が多くて好きでなかった。」「融通がきかない。」「自分が決めたことは、何があっても必ずその通りにしようとする。」「急な予定変更で怒り出す。」「興味のあることだけは一方的に話す。」等の事実から、現段階では発達障がいの特徴をもっている可能性

も視野に入れた対応が必要ではないかと判断しました。

さらに、苦戦状況に活かせる資源について検討して「判断」の欄に記述しました。Aが発達障がいの特徴をもっていると仮定すれば、見通しをもち計画通りに活動が進むことも、本人が安心して取り組み、力を発揮するために重要な資源になりうると考えました。

【表1】見立てシート（「」内は児童の言葉を表しています。）

時期	注目した事実	判断
情報の把握・不適応状況の理解	十月以前 幼稚園以来小学校でも一人遊びが多かった。 「学校は人が多くて好きでなかった。」 「無理をして周りに合わせてきた」 自分から話しかけることはない。 「誰も話しかけてくれない。ひとりぼっちだった。」 「今まで自分だけでなく周りの友達も何回も悪口を言われていて嫌だった。ずっと我慢してきた。」 相談したことはない。 自分が決めたことは、何があっても必ずその通りにしようとする。 急な予定変更で怒り出す。 アニメが好き。興味のあることだけは一方的に話す。	<ul style="list-style-type: none"> ・集団の中にいることやコミュニケーションが苦手なAは、周りに合わせ、嫌なことがあっても不快な感情やストレスを抑えてきたのだろう。（苦戦） ・これまで悪口を言われたり聞いたりすることが何度もあり、嫌な思いを積み重ねてきたのだろう。（苦戦） ・決めたとおりにしようとする分、できない時には相当のストレスとなっていたのだろう。（苦戦） ・学校、学級は嫌なことばかり起きる場所ととらえているかもしれない。（苦戦） ・相談できない分、解決方法が見いだせず、徐々に苦しさが増してきたのだろう。（苦戦） ・これまで本人なりに我慢してきた不安や不満、ストレスが、限界に達したのだろう。（苦戦） ・一週間休むほどの傷つきや恐怖を感じたのではない。（苦戦） ・これまでの辛さを、やっと表現することができたとも理解できるのではない。（資源）
	十月中旬 友達に「バカ、キモイ」と言われた。 「悪口を、何回も言われて嫌だった」 いじめた子の反省を伝え聞くが不安は消えない。 一週間欠席が続いた。	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったときに周囲に相談ができれば、不安やストレスを抱え込まず、適切に処理できるようになるのではない。 ・Aの思いを聴く体制づくりや相談するスキルの獲得が有効ではないか。（資源） ・「相談室でいいよ」「誰にも会わない時間に登校していいよ」という担任の言葉に安心感がもてたので、相談室登校が実現できたのだろう。（資源）
	現在 「なぜ学校に行かなければいけないのかわからない。」 仲のよい友達にも、今は「会いたくない」と言う。 午前中に1時間程度の相談室登校が1か月続いている。 「先生に無理矢理時間を引き延ばされてイヤだった。」	<ul style="list-style-type: none"> ・学校を拒否する段階はクリアしたようだ。（資源） ・見通しをもち計画通りに活動が進めば、安心して取り組み、力を発揮できる子なのではないか。（資源） <p>〔 番号の事実を基に、苦戦状況と資源を判断しました。〕</p>

2 仮説ストーリーの設定

仮説ストーリーは、見立てシート【表2】(p4)のように考えました。仮説ストーリー1は、見立てシート「判断」の欄に記述した苦戦を基に考えました。現在は「信頼感、安心感の低下」が強い状況であり、これらの回復が大切であると判断しました。

仮説ストーリー2は、苦戦状況や「気持ちを受け止めてもらえると安心できるのではないか。」「計画通りに進めば、安心して活動できるのではないか」「担任の『相談室でいいよ』『誰にも会わない時間に登校していいよ。』という言葉に安心感をもち、相談室登校が実現した。」という資源を基に考えました。

3 目標設定と対応策の検討

長期目標は、仮説ストーリーを基に見立てシート【表2】のように設定しました。この長期目標を達成するためには、友達関係の修復やAのソーシャルスキル獲得などへの援助が必要ですが、現在は友達との接触に強い不安を抱いており、すぐに関係を修復することは難しい状況であること

から、長期目標を細分化し、スモールステップで取り組む必要性について確認しました。そして、現在の相談室登校(午前中1時間程度)の状況は不安定ではあるが、安心感を高める対応をすれば、1時間の活動を充実できるのではないかと判断して「ステップ1」を設定しました。

対応策は、当面2週間の目標「ステップ1」の実現に向けて、どのような指導・援助が必要かアイデアを出し合い検討しました。相談室で今以上に安心して過ごせるようにするためには、教師がAの気持ちを聴き、受け止めるようなかわりをする事や、相談室での活動内容や方法、時間的な流れや順序等について、前もってAと話し合い、見通しをもって過ごせるような援助等が必要だと考え、見立てシートのような対応策を決定しました。

なお、2週間後に情報交換と見立て直しの機会をもつことを確認しました。

【表2】見立てシート

仮説ストーリー	1	幼いころからコミュニケーションがうまくとれない状況が続いて孤立感を覚え、他者に過度に合わせることの苦労や手を抜くことができないがゆえの辛さ、いじめられることによる不快な感情を抱えながらも、相談もせずこれまで何とかしのいできた。しかし、今回の友達からの中傷をきっかけに、蓄積してきた不安や恐怖が一気に高まり、登校できない状況となったのではないかと判断した。 【信頼感、安心感の低下】					
	2	【信頼感、安心感】Aが現在、長くて1時間の相談室登校をしている中で、生活や活動への安心感や教師への信頼感がさらに増すような指導・援助を行えば、登校への抵抗感が減ったり、登校意欲が増したりするだろう。さらに、相談室での安心感や教師への信頼感が増した段階で、友達とのかかわりが徐々に広がるような指導・援助を行えば、友達への信頼感が回復していくだろう。					
目標	長期	友達を含めた周囲への信頼感を高め、安心して学校生活を送れるようにする。					
	ステップ1	安心感を高めることで、相談室での1時間の活動を充実させ、2週間維持する。					
対応策	目的	誰が	誰に	何を	いつ	いつまで/頻度	どのようにする/しない
	安心感、信頼感を高める。	担任	A	登校・下校時刻について話し合う。	明日	2週間	・友達と会わずにすむ、不安のない登下校の時間帯について話し合う。
	安心感、信頼感を高める。	担任 教務主任	A	声をかける。 または、面談をする。	登校時	毎日1度は必ず	・心配なこと、または、してほしいことはないか聴く。 ・無理に教室に誘わない。急に時間を引き延ばさない。
	見通しをもたせ、安心感を高める。	教務主任	A	一週間の学習計画を立てる。	2,3日中に	2週間	・本人が興味をもっている活動内容や、本人の希望をもとに活動計画を立てる。突然の変更をしない。
	信頼感、自己肯定感を高める。	担任, 教務主任 養護教諭	A	認める言葉かけをする。	登校時	2週間	・認める言葉かけの他「計画表」へシール等を貼って承認する。 ・母親にも、Aの小さな成長を伝える。
安心感、信頼感を高める。	養護教諭	母親	話を聴く。	来校時	週に1,2度	・家でのAの様子や母親の思いを聴く。ねぎらいの言葉をかける。	
関係機関との連携	総合教育センター						
振り返り時期(評価)	2週間後に、状況報告と見立て直しを行う。						

この事例は、理解が損なわれない範囲で内容を変更、再構成しています。